

4 国際交流

[概要]

本館では、研究活動の国際性を拡充すべく、国際研究集会の開催や外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣等を行っている。2020年度の具体的な取り組みは以下のとおりである。

1. 国際戦略の制定

本館は博物館機能を有する大学共同利用機関としてのミッションを達成し、現代的視点と世界史的視野のもとに、日本の歴史と文化に関する研究を推進する国際拠点としての役割を果たすため、以下の国際戦略を制定している。この国際戦略に対応するかたちで、海外研究機関との学術交流協定等の締結、国際交流事業等の充実、外国人研究員等の受入、国際シンポジウムの開催等に取り組んだ。

(組織的な連携)

- ・海外の機関と組織的な連携を強化する。当面は、東アジア、ヨーロッパ及び北米を重点地域とする。
- ・日本歴史研究の国際的なネットワークを構築する。

(共同研究、成果発信)

- ・国際的な共同研究を推進し、成果の国際発信を強化する。
- ・展示、フォーラム、博物館資料の活用等を通じて国際共同研究の可視化、高度化を図る。

(若手研究者育成)

- ・協定機関との派遣・招へい等を通じて若手研究者の育成を図る。

2. 学術交流協定等の締結

エトヴェシュ・ロラーンド大学人文学研究科(ハンガリー)、ハンガリー国立博物館(ハンガリー)、セインズベリー日本研究所(英国)、バンドン工科大学(インドネシア)の4機関と新規に学術交流協定を締結した。

3. 学術交流協定等に基づく国際交流事業等の充実

国立中央博物館(韓国)との「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究II」等7件の国際交流事業を推進した。前年度より引き続き、ミュンヘン五大陸博物館(ドイツ)において、国際連携展示「日本を集めるーシーボルトが紹介した遠い東の国」(2019年10月11日～2021年9月13日 ※新型コロナウイルスの影響で2020年3月14日から臨時休館。2020年5月12日再開)を、ウィーン世界博物館(オーストリア)において、国際連携展示「明治の日本ーハインリッヒ・フォン・シーボルトの収藏品から」(2020年2月13日～2020年8月11日 ※新型コロナウイルスの影響で2020年3月11日から臨時休館。2020年7月2日再開)を開催するとともに、ジュネーブ市立アリアナ美術館においては国際連携展示「菊・龍・サムライーアリアナ美術館所蔵の日本陶磁」(2020年12月11日～2022年1月9日 ※新型コロナウイルスの影響で2020年12月24日から臨時休館。2021年3月1日再開)をこれまでの研究の成果をもとに開催した。

4. 外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣

本館の受入制度に基づき、外国人研究員を1名受け入れた。

5. 国際シンポジウム等の開催

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用ー日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築ー」の一環として、国際研究集会「Exhibiting “Japan” Overseas 海外で《日本》を展示すること：海外のコンテクストと日本のコンテクスト」(2021年3月29日 主催：国立歴史民俗博物館、チューリッヒ大学東洋美術史研究室)をオンラインにて開催し、本館の国際化と研究分野・研究手法の多角化を研究者コミュニティの内外に示すことができた。

なお、2020年度には、その他3件の国際シンポジウム・国際研究集会(「近現代東アジアのスポーツ」「ジェンダーから見る歴史展示ー韓国・アメリカ・台湾、そして日本ー」「東アジアの文字文化とジェンダーII」)の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの影響により中止となった。

国際交流担当 松田 陸彦

[国際交流事業一覧]

| | 相手機関名 | 事業名 | 事業主体者 |
|--------|--------------------|----------------------------------|-----------------|
| 継 続 | 韓国 ソウル大学校 | 放射性炭素14年代の偏重分布—考古・物理・統計学的学際研究— | 研究部 藤尾慎一郎 |
| | 台湾 国立台湾歴史博物館 | 日本と台湾からみた地域歴史像の解明 | 研究部 樋浦 郷子 |
| | 韓国 国立中央博物館 | 先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究II | 研究部 高田 貫太 |
| | 韓国 国立文化財研究所 | 国立文化財研究所との研究者交流事業 | 国際企画室長 大久保純一 |
| | 英国 グラスゴー博物館機構 | スコットランドにおける日本歴史展示構築のための調査研究 | 研究部 日高 薫 |
| 新 規 | 韓国 国立慶北大学校人文学術院 | 東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究 | 研究部 三上 喜孝 |
| | 韓国 国立釜山大学校博物館 | 国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力 | 研究部 藤尾慎一郎 |

(1) 放射性炭素14年代の偏重分布—考古・物理・統計学的学際研究—
2018～2022年度
(事業主体者 藤尾慎一郎)

1. 目的

日韓の先史時代における炭素14年代を用いた共同研究を行い、その成果をデータベース（ソウル大学校にて作成予定）、国際シンポジウム、国際展示として可視化・高度化する。

2. 今年度の研究計画

二国間交流事業が不採択となったことで、新たな枠組み作りについて、ソウル大学校に赴き、金壯錫教授（昨年9月よりソウル大学校博物館長に就任）と議論する。DB（日韓先史時代炭素14年代測定値DB）の公開方法をめぐる議論が中心である。

3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスにより、海外との渡航ができなかったため、当該年度の計画は未達成である。

4. 今年度の研究成果

計画が未達成のため、成果はない。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

李 昌 熙 釜山大学校・教授
◎金 壯 錫 ソウル大学校・教授
高田 貫太 本館研究部・教授（2021.1より） 箱崎 真隆 本館研究部・特任助教
○坂本 稔 本館研究部・教授 ◎藤尾慎一郎 本館研究部・教授

(2) 日本と台湾からみた地域歴史像の解明
2018～2022年度
(事業主体者 樋浦郷子)

1. 目的

国立歴史民俗博物館と国立台湾歴史博物館は、これまで災害史を中心として、「資料に依拠する」という基本的な研究方法にそって、共同研究を行ってきた。

そこで災害史を継続課題とするとともに、資料研究の「歴博所蔵『高山族民俗資料』」、文献資料研究とフィール

ド研究をあわせもつ「近代の教育と植民地時代」、フィールド研究を通じた「日本と台湾の漁撈文化」、「民俗研究映像の制作・保存・共有」の4つのテーマについて共同研究を推進することを目的とする。

また、これまで共同研究を展開する上で、組織と研究者同士のネットワークが確立できたのだが、さらに双方の研究者の交流を組織的に発展させることも目的の1つとする。

さらにモバイルミュージアムを台湾でも展開することで、可視化高度化事業、大学連携事業とも関連付けることを目指す。

2. 今年度の研究計画

国立台湾歴史博物館で企画展示開催のため、本館教員3名を2回派遣する。

3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初2020年7月開催予定であった特集展示「東アジアを駆け抜けた身体—スポーツの近代—」を2021年1月26日～3月14日に会期を変更し開催した。

また、2020年度に開催予定であった国立台湾歴史博物館での企画展示および国立成功大学での国際シンポジウムについては、来年以降に延期となった。

4. 今年度の研究成果

2019年度は3回の台湾訪問、1回の先方機関からの招へい等を通じ順調に相互の調査を行うことができた。しかし、2020年は思いがけない新型コロナウイルス感染症の拡大により、3月から台湾を訪問することが困難になった。非常に困難のなか、特集展示も7月から2021年1月開幕へと延期され、一時はその実現も見通せない状況に陥った。他方台湾でも、2020年度秋に予定していた国立台湾歴史博物館での企画展示および国立成功大学での国際シンポジウムが、2021年夏へと延期になった。

国立台湾歴史博物館にはこうした前例のない状況下においても、冷静に対応いただいている。歴博では、半年遅れてなんとか2021年1月26日に特集展示が開幕した。共同研究のなか焦点化してきた「張星賢資料」については、荒川章二名誉教授を中心に十分な検討を行い、特集展示のなかで一章分をすべて張星賢に割いて、多くの資料を国立台湾歴史博物館から借り受けて構成した。

資料の借り受けにあたっては、過去に例がないことではあるが、歴博から国立台湾歴史博物館へ教員が出向かず、オンライン会議で資料を確認しながら、資料の梱包、発送、注意点などの意見交換を行った。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

○石 文 誠 国立台湾歴史博物館・研究組研究員

◎陳 怡 宏 国立台湾歴史博物館・研究組長

林 能成 関西大学・教授

内田 順子 本館研究部・准教授

松田 陸彦 本館研究部・准教授

西谷 大 本館・館長

川村 清志 本館研究部・准教授

原山 浩介 本館研究部・准教授

久留島 浩 本館研究部・特任教授

○小瀬戸恵美 本館研究部・准教授

◎樋浦 郷子 本館研究部・准教授

(3) 先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究II

2019～2021年度

(事業主体者 高田貫太)

1. 目的

学術交流協定締結機関である韓国国立中央博物館（以下、中央博）とは、2009年度～2012年度に第2期、2015年度～2018年度に第3期の共同研究を行い、総合展示第1室リニューアル事業に対する中央博側の協力を得ることができた。

ただ、共同研究の成果公開の中の論文集刊行は、未達成であり、かつもう少し共同研究を継続する必要があることから、引き続き「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究」をおこなうことにした。また、2020年度国際企画展示『加耶』を共催で開催することになり、その展示協力についても一層推進していくことにした。

2. 今年度の研究計画

展示協力と、共同研究会とそれに関する現地調査を1, 2回程度行う。

特に、2020年度国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—(仮)』の開催実現のために、展示協力をを行う。その展示内容に共同研究の成果を反映させるように努める。

3. 今年度の研究経過

【展示協力】

・7月～9月に開催する予定であった『加耶』展の内容について、協議を行った。またパネル作成や図録の執筆を行い、それに必要な資料・図版を中央博側から提供いただいた。

【共同研究】

・コロナ禍のために、予定した共同研究を実現することはできなかった。ただ、国立中央博物館考古歴史部学芸研究士の金大煥氏が、2020年12月16日～2021年6月15日まで、外国人研究員として来日され、その中で『加耶』展の図録内容の検討や、加耶と倭の交流を示す近隣の遺跡を踏査するなどの研究を行っている。

4. 今年度の研究成果

今年度は、2020年度国際企画展示『加耶』の展示内容や構成、借用遺物について、国立中央博物館と協議を重ねて、ほぼ確定することができた。また展示協力の中で、共同研究についても着実にを行い、その成果を歴博の『加耶』展に反映させていくことにしている。しかしながら、新型コロナの影響により、2020年6月4日に歴博における『加耶』展の延期が決定した。

5. 事業組織 (◎は事業主体者, ○は副主体者)

| | | | |
|-----------|---------------------|----------|----------------|
| キム ミギョン | 国立中央博物館・学芸研究士 | キム デファン | 国立中央博物館・学芸研究士 |
| ○ヤン ソンヒョク | 国立中央博物館・学芸研究員 | ◎ホン ジングン | 国立中央博物館・考古歴史部長 |
| 藤尾慎一郎 | 本館研究部・教授 | 上野 祥史 | 本館研究部・准教授 |
| 三上 喜孝 | 本館研究部・教授 | ○松木 武彦 | 本館研究部・教授 |
| ◎高田 貫太 | 本館研究部・教授 (2021.1より) | | |

(4) 国立文化財研究所との研究者交流事業

2019～2020年度

(事業主体者 大久保純一)

1. 目的

本事業は当館と国立文化財研究所との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。

協定書の別表に「協定書第2条に基づく具体的な交流協力」として「研究者の交流」を掲げ、「毎年両機関は互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させるものとする」と定めていることから、これを国際交流事業として位置づけて実施する。研究者の相互受入に係る調整は、当館国際企画室と国立文化財研究所研究企画課を窓口として行い、双方の機関が組織的な連携を図る。

2. 今年度の研究計画

互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させる。なお、航空賃は派遣側機関が負担し、派遣先での交通費・滞在費等は受入側機関が負担するものとする。

3. 今年度の研究経過

2019年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響で海外への渡航ができない状況にあり、事業を実施することができなかった。

4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルスの影響により、2019年度より延期していたものを含め、派遣・受け入れともやむなく実施を

見送った。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

咸 喆 熙 国立文化財研究所・学芸研究士

崔 智 燕 国立文化財研究所・研究員

○洪 瑛 珠 国立文化財研究所・係長

◎金 三 基 国立文化財研究所・課長

坂本 稔 本館研究部・教授

上野 祥史 本館研究部・准教授

○松田 睦彦 本館研究部・准教授

◎大久保純一 本館研究部・教授

(5) スコットランドにおける日本歴史展示構築のための調査研究 2020～2022年度 (事業主体者 日高 薫)

1. 目的

グラスゴー博物館機構は、ケルヴィングローヴ美術博物館を中心に、グラスゴー周辺にある12の博物館や中央収蔵庫施設からなる組織である。日本政府が1878年に寄贈した1,150点の資料と、1901年の万国博覧会を機にそれ以降継続的に収集された日本資料約2,500点を所蔵する。

本事業においては、これらの日本資料（とくに1878年の日本側との交換寄贈資料）の概要調査をおこない、必要な情報を提供することにより、同館によって出版が計画されている館蔵日本コレクション目録の作成に向けて協力する。また、調査による資料情報の付与は、グラスゴー市郊外にある中央収蔵庫における収蔵展示に反映されるため、これにより現地での展示を通じた日本資料の活用を充実させることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①客員教員三木美裕氏を含め国立歴史民俗博物館から2名の研究者を派遣し、グラスゴーをはじめとするスコットランドにおける日本美術関連資料の所在調査をすすめる。
- ②①の調査成果を、順次グラスゴー博物館機構における目録に反映させる。
- ③グラスゴー博物館機構収蔵展示における日本文化理解と、日本研究活性化のための教育事業に協力する。
- ④ダラム大学東洋美術館において進行中の展示・教育事業に①の調査成果を反映させる。

3. 今年度の研究経過

- ①1860～80年代、グラスゴーに日本コレクションが形成された経緯について、当時の学芸部長ペイトンに関する資料を中心に記録・蔵書・新聞記事などの文献資料調査をすすめた。(2019年度から継続)
- ②ケルヴィングローヴ博物館における常設展示への日本関係資料の展示、また同館における日本関係の特別展開催に関する打合せをリモート会議でおこなった。
- ③ダラム大学東洋博物館との連携による新収蔵の版画コレクションを現地で活用する「Monogatari: the art of storytelling in Japanese woodblock prints」展(2020年5月29日～10月4日開催予定)の開催に向けてリモート会議で準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で展覧会の開催は2021年に延期された。

4. 今年度の研究成果

1860～80年代、グラスゴーに日本コレクションが形成された経緯について、当時の学芸部長ペイトンに関する資料を中心に記録・蔵書・新聞記事などの文献資料調査をすすめ、未公開資料を発掘し、新知見を得た。

ケルヴィングローヴ博物館における常設展示への日本関係資料の展示、また同館における日本関係の特別展開催に関する打合せを進めた。

ダラム大学東洋博物館における企画展示に関連して、同館所蔵の資料について、北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)との連携により国内所在の関連資料の調査研究をおこなった。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

◎マーティン・ベラミー グラスゴー博物館機構・研究部長

ユピン・チャン グラスゴー博物館・学芸員

澤田 和人 本館研究部・准教授
三木 美裕 本館・客員教授
◎日高 薫 本館研究部・教授

福岡万里子 本館研究部・准教授
○大久保純一 本館研究部・教授

(6) 東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究 2020～2022年度 (事業主体者 三上 喜孝)

1. 目的

本事業は当館と慶北大学校人文学術院との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。慶北大学校人文学術院は、HK+事業「東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究」として韓中日の木簡研究を推進している。国立歴史民俗博物館との学術交流協定を通じて日本・韓国の古代木簡の共同研究を進め、東アジアにおける木簡文化、さらには漢字・儒教・律令など中国文化伝播の実態解明をめざす。

一方、本館でも、古代東アジアの文字文化に関する共同研究や、企画展示(「古代日本 文字のある風景」2001年、「文字がつなぐ 古代の日本列島と朝鮮半島」2014年)などをこれまで行ってきた。当館としては、慶北大学校人文学術院と積極的に学術交流を進めると同時に、この協定を足がかりに韓国や中国の他機関とも交流を進め、東アジア文字文化に関する研究拠点となることをめざす。

2. 今年度の研究計画

共同研究会とそれに関する現地調査を1, 2回程度行う。

3. 今年度の研究経過

以下の講演会ならびに研究会をオンラインで行った。

1. 慶北大学校人文学術院HK+事業団第11回専門家招請特講

仁藤敦史「白村江敗戦後の倭国と新羅・唐関係—『日本書紀』対外関係記事の批判的検討—」(オンライン参加)

日 時：2020年9月17日(木) 16:00～18:00

会 場：慶北大学校 人文韓国振興館313号室(参加者約15名)

2. 慶北大学校人文学術院HK+事業団 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来 —韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に—」

日 時：2020年11月5日(木)～11月7日(土)

会 場：慶北大学校人文韓国振興館学術会議室Ⅱ(参加者約80名)

発表者：三上喜孝「日韓の木簡からみた古代東アジアの医薬文化」(オンライン参加)

稲田奈津子(東京大学史料編纂所)「東アジア儀礼研究の新視角—「物品目録」の検討から—」(オンライン参加)

3. 韓国木簡学会・慶北大学校人文学術院HK+事業団・仁川桂陽山城博物館共催国際学術シンポジウム「東アジア論語の伝播と桂陽山城」

日 時：2020年11月27日(金) 9:00～18:00

会 場：桂陽山城博物館 2階 会議室

発表者：三上喜孝「古代日本における論語木簡の特質 —韓国出土の論語木簡との比較から—」(オンライン参加)

4. 国際研究集会「中国・韓国における古代金石文研究の最前線」(司会：三上喜孝)

日 時：2021年3月18日(木) 13:00～

会 場：オンライン開催(Zoom)(参加者23名)

王海燕氏(浙江大学)「浙江省の買地券」(日本語)

李東柱(イ・ドンジュ)氏(韓国・国立慶北大学校人文学術院)「新羅の文書行政と印章」(通訳：橋本繁(慶北大学校人文学術院))

4. 今年度の研究成果

2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、韓国での資料調査や研究会ができなかったが、オンラインにて3件の講演会ならびに国際研究集会に参加し、1件の国際研究集会を行った。

5. 事業組織 (◎は事業主体者, ○は副主体者)

- ◎尹 在 碩 国立慶北大学校人文学術院・院長
 李 京 燮 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
 橋本 繁 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
 李 東 柱 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
 金 跳 咏 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授
 ○小倉 慈司 本館研究部・准教授
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授

(7) 国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力 2020～2022年度 (事業主体者 藤尾慎一郎)

1. 目的

第3期の事業として実施した国際交流事業「国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力」(2017～2019年度)が終了した。総合展示第1室リニューアルが2019年3月に完成したことで、今後10年間、資料の借用が継続するため、定期的な資料チェックなどを目的とし、展示協力事業は継続する必要がある。さらに釜山大学校博物館から資料借用の要請があった際には、歴博側も積極的に検討していく。釜山大学校博物館もリニューアルの話があるため、歴博のリニューアルで培った経験と実績をもって協力可能である。

また第3期から始めた研究者交流は、朝鮮半島南部の初期鉄器時代を中心に出土する弥生系土器の調査や、朝鮮半島の新石器時代から三国時代にかけての出土人骨の調査など、新たな研究テーマでの展開を始めつつある。こうした研究を通じて改めて互いの研究内容への理解を深めることで、新しい共同研究テーマを探すことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①研究者交流 両機関は互いに研究者1名を10日ほど派遣し、研究交流を促進する。
 ②展示協力 両機関の常設展示や企画展示の開催にあたって、相互に協力・連携を推進する。
 歴博総合展示第1室リニューアル事業において釜山大学校博物館から借用中の所蔵資料のメンテナンス。

3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの影響で海外との渡航ができなかったため、予定した事業を行うことはできなかった。

4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルスの影響で海外との渡航ができなかったため、計画は未達成である。

5. 事業組織 (◎は事業主体者, ○は副主体者)

- 安 星 姫 釜山大学校博物館・学芸研究室長
 ◎金 斗 喆 釜山大学校博物館・館長
 箱崎 真隆 本館研究部・特任助教 坂本 稔 本館研究部・教授
 齋藤 努 本館研究部・教授
 ○高田 貴太 本館研究部・教授 (2021.1より) ◎藤尾慎一郎 本館研究部・教授

[国際シンポジウム]

「Exhibiting “Japan” Overseas 海外で《日本》を展示すること：海外のコンテクストと日本のコンテクスト」

会 場：国立歴史民俗博物館（オンライン開催）
 会 期：2021年3月29日
 参加者：127人（うち外国人70人）
 主催：国立歴史民俗博物館，チューリッヒ大学東洋美術史研究室

1. 開催趣旨

本シンポジウムは、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用－日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」による成果の公開の一端である。

ヨーロッパをはじめ海外には、19世紀に外国人らの手によって収集された膨大な日本関係資料が未整理・未紹介のまま調査・研究・活用の機会を待っている。これらの多くは収集の時期や経緯がほぼ明確であるため、時代の規準となる歴史資料として極めて貴重である。日本の研究者は、そうした海外に所在する日本関係資料を、日本における成立背景の中でとらえる傾向にある。いわば、日本の失われた遺産として、在外資料を回収することを主眼としている。しかし、在外資料は運ばれた先でも新たな意義を築いている。

標記オンライン・シンポジウムでは、このような日本とはまた異なる海外における在外資料の役割という視点から、報告を行う。加えて、コロナ禍に対応すべく、リモート調査の試みについて、事例研究を紹介する。

2. 開催内容

| | |
|------------------|--|
| 2021年3月29日（月） | 日本時間 17：30～19：30 スイス時間 10：30～12：30 |
| 17：30～17：40（日本） | 開会の挨拶および趣旨説明 |
| 10：30～10：40（スイス） | 日高薫（国立歴史民俗博物館） |
| 17：40～18：05（日本） | 西洋における日本美術とその展示 |
| 10：40～11：05（スイス） | ハンス・ビャーネ・トムセン（チューリッヒ大学） |
| 18：05～18：30（日本） | 万延元（1860）年遣米使節団が見せたかった「日本」 |
| 11：05～11：30（スイス） | 福岡万里子（国立歴史民俗博物館） |
| 18：30～18：45（日本） | コメント |
| 11：30～11：45（スイス） | 久留島浩（国立歴史民俗博物館・特任教授） |
| 18：45～19：10（日本） | リモート資料調査の試み |
| 11：45～12：10（スイス） | チューリッヒ大学東アジア美術史学科および チューリッヒ工科大学グラフィックコレクション |
| 19：10～19：25（日本） | コメント |
| 12：10～12：25（スイス） | 後藤真（国立歴史民俗博物館） |
| 19：25～19：30（日本） | 閉会の辞 |
| 12：25～12：30（スイス） | 大久保純一（国立歴史民俗博物館） |
| | （進行：澤田和人・国立歴史民俗博物館） |

3. 総括

オンラインによる国際シンポジウムは本館としては初めての試みであり、今回はZoomのウェビナーを用いて開催した。広報活動はホームページへの掲載と口コミのみであったにもかかわらず、主催機関が位置する日本とスイスだけでなく、イギリス・オーストラリア・アメリカ合衆国・オーストリア・ドイツ・香港・スペイン・フランス・カナダ・イタリア・ベルギー・ノルウェー・チリ・スロベニア・ラトビア・ニュージーランド・ロシア連邦・オランダと、合計20の国と地域から視聴があり、対面開催以上に国際色が豊かとなった。また、研究者だけでなく、一般市民も参加しやすいという意見が寄せられた。これらは、オンラインの利点といえよう。使用言語を日本語としたが、同時通訳を入れるなどして多言語化すれば、さらに多くの海外からの参加が見込まれたものと思われ、その点、今後の工夫が必要であると感じた。

「CRM (Cultural Resource Management) Symposium 2021: Challenges to Manage Cultural Resources during Crises」

会 場：オンライン
 会 期：2021年3月23日
 参 加 者：105人（うち外国人94人）
 主 催：バンドン工科大学，国立歴史民俗博物館

1. 開催趣旨

自然災害やパンデミックをはじめとする，様々な危機（crises）における文化資源のマネジメントの試みをテーマとする。歴博とバンドン工科大学（ITB）は今年度から包括連携協定を結んでおり，今回のイベントはその取り組みの一環として位置付けられる。基調講演ではITBのPindi Setiawan講師，および本館から橋本テニユアトラック助教が登壇し，話題提供を行った後質疑応答と議論を行う。パラレルセッションでは3つのテーマでセッションを設け，各々発表者5～6名を設定し議論を行う。

2. 開催内容

13：00－13：20 OPENING

Opening Speech from Andryanto Rikrik Kusmara (the Dean of Faculty of Art and Design, Institut Teknologi Bandung)

Opening Speech from Masaru Nishitani (the Director General of National Museum of Japanese History)

13：20－14：55 KEYNOTE SESSION

Moderated by Sakiko Kawabe (National Museum of Japanese History)

[Keynote Speech 1] Virtual Volunteering and Collaboration Platform for Transcribing Historical Japanese Documents

Yuta Hashimoto (National Museum of Japanese History)

[Keynote Speech 2] HERITAGE from HOME

Pindi Setiawan (Bandung Institute of Technology)

14：55－15：05 BREAK

15：05－16：50 PARALLEL SESSION

SESSION A “Archival and Digital Preservation and Utilization of Cultural Resources”

Moderated by Meirina Triharini (Bandung Institute of Technology)

[A 1] Digitization of Japanese Historical Resources and Establishment of Data Infrastructure

Akihiro Kameda (National Museum of Japanese History), Makoto Goto

(National Museum of Japanese History)

[A 2] The Role of Archival Research in the Preservation of Traditional Knowledge Under the Risk: A Case Study of Ethnographic Recordings of

Evdokia Kozhevnikova, Svaneti region, Georgia

Tamar Meladze (Tsukuba University Graduate School)

[A 3] Digital Archiving Development of Artifact Data Based on the Result of

3D Documentation Method for Digital Museum

Inne Chaysalina (Bandung Institute of Technology)

[A 4] Study of the Participatory Based Data Collecting of Physical Culture

Artifacts for Digital Museums

Fiona Yasmine (Bandung Institute of Technology Graduate School)

SESSION B “Community Planning & Public Involvement in Cultural Resource Management”

Moderated by Sakiko Kawabe (National Museum of Japanese History)

[B 1] Banana Smart Village: Village Transformation through Banana Plantation

Maharani Dian Permasari (Institut Teknologi Nasional, INABIG), Ketut

Wikantika (Bandung Institute of Technology, INABIG), Fenny Martha Dwivany (Bandung Institute of Technology, INABIG)

[B2] The Roles of the Local Communities in Sustainable Conservation of Archaeological Sites: Reflections from the Japanese Experience

Dongdong Wang (University of Science and Technology Beijing)

[B3] Integrating Cultural Values in Spatial Planning: The Challenges in Taman Hutan Raya (Grand Forest Park) South Bali, Indonesia

Dicki Elhasani (Wageningen University, Master's Degree Graduate)

[B4] Co-design Approach for Cultural Resources Management

Dhientia Andani (Prasetya Mulya University)

SESSION C "Transformation of Traditions"

Moderated by Arianti Ayu Puspita (Bandung Institute of Technology)

[C1] The Negotiation of Persistent and New Skills for the Bamboo Craft Industry through the Regional Development Project, Case Study:

Bamboo Development Project with Salawu Craftspeople

Amira Rahardiani (Kanazawa University Graduate School)

[C2] Institutional device - in the Case of Kagayuzen industry

Yuki Araki (Kanazawa University Graduate School)

[C3] Trans-structural Chanoyu Practices: Toward the Understanding of the Duration of Recurrent Creation

Kozue Ito (Hokuriku University)

[C4] Preservation of Immaterial Cultural Heritage in an Age of Crisis: A Case Study on Japanese Rural Festivals

Timo Thelen (Kanazawa University)

16:50 - 17:00 CLOSING

3. 総括

様々な危機に直面する社会において文化資源を維持し継承していくためのアイデアや具体的な取り組みについて議論することができ、特に、社会の変化に対応した持続的な取り組み、多様な人々やコミュニティとの協働、それらを実現するためのデジタル技術の可能性と課題という視点から意見が交わされた。

本シンポジウムの開催を契機に立ち上げられたCRM International Network (CRM-IN) により、今後もCRM Symposium を年次開催することが計画されており、本シンポジウムで見いだされた課題や論点をもとに議論がさらに展開していくことが期待される。

[外国人研究員]

| 氏名 | 所属 | 研究課題 | 期間 |
|-------------------|-----------|------------------------|--------------------------|
| キム デファン (金 大煥) | 韓国国立中央博物館 | ネットワーク理論から見た加耶と日本列島の交渉 | 2020.12.16～ 2021.3.31 |

[協定締結機関との交流]

| 招聘 | | | |
|-------------------|-----------|--|--------------------------|
| 氏名 | 所属 | 用務 | 期間 |
| キム デファン (金 大煥) | 韓国国立中央博物館 | 外国人研究員としての研究(研究課題「ネットワーク理論から見た加耶と日本列島の交渉」) | 2020.12.16～ 2021.3.31 |